

《資料》

竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

—— 和歌を主題とする組香(六) ——

本稿は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介—和歌を主題とする組香(一)—(『社会科学』第46巻第3号、二〇一六年一月)、『同—同(二)—』(『社会科学』第46巻第4号、二〇一七年二月)、『同—同(三)—』(『社会科学』第47巻第1号、二〇一七年五月)、『同—同(四)—』(『社会科学』第47巻第2号、二〇一七年八月)、『同—同(五)—』(『社会科学』第47巻第3号、二〇一七年十一月)に引き続き、竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなうものである。本稿では、射の巻から、三神香、三友香、梅花香、神杵香、深山木香、神垣香、礮衛香の七つの組香を取り上げる。資料に関わる基本的な説明は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介(『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月)を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、前掲『社会科学』第46巻第3号に詳述している。本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名とともに

矢野 環
福田 智子

通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「朱」と示し、一面の終わりには、〴〵を付して丁数を記す。考察には、(1) 竹幽本組香の方法、(2) 和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。

一、(1) の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」(『社会科学』第46巻第3号)を参照されたい。

一、(2) で引用する和歌作品の本文は、特に断らない限り『新編国歌大観』Ver.2(角川書店、二〇〇三年)に拠る。

一、巻末には影印を付す。

《射卷一〇〇》三神香

【翻刻】

△(朱) 三神香

住吉

夜やさむき衣やうすきかたそきのゆきあいの間より霜

やおくらん

玉津嶋

立かへりまたも此世に跡たれん名もおもしろき和哥の

浦波

人麿

ほのくと明石の浦の朝霧に嶋かくれ行舟おしそおも

ふ 「射四四ウ

此三首を以て組たる香也。

一 十炷香の札を用。

一 一二三の香、各三包充、都合九包出香とし、皆焚終て包紙

を開くべし各外に括へ。試に出す。

一 本香九炷聞終て後に名乗紙に左のことく認め出すべし。

一の香、二柱にても三柱にても續たるは 住吉と認。 「射四五オ

二の香同斯 玉津島と認。

三の香同斯 人麿と認。

續たる香無は 浦舟と認。

一 記録点は、独聞二点、二人より一点充也。神號を上記す。

認様左に顕す。考べし。續たる香を聞當たるは下に其神哥

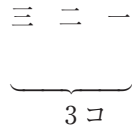
の五文字を朱にて認るべし。 「射四五ウ

三神香之記

〔表〕 「射四六オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、「一」「二」「三」の香(試香あり)各三包、計九包を用いる。すべてを焚き終わつてから、香包紙を開き、正答を披露する。

* 答えには、十炷香札を用いる。「一」「二」「三」の香には、それぞれ「一」「二」「三」の札を打つ。九炷を聞き終わつた後、この通常の答えに加えて、同香が連続して出た場合には、「一」の香では「住吉」、「二」の香では「玉津島」、「三」の香では「人麿」、同香が連続して出なかつたときは「浦舟」と、名乗紙に記して提出する。

* 点数は、独り聞き二点、二人以上では一点とする。神號(名

乗紙に記した名目）は、香之記の名乗の下に記す。また、連続して出た香を聞き当てた場合は、香之記の下部に、「一」の香では「夜やさむき」、「二」の香では「立かへり」、「三」の香では「ほのく」というように、各歌の初句の五文字を朱で記す。

(2) 和歌作品との関わり

和歌三神（住吉・玉津嶋・人麿）にちなんだ組香である。引用されている和歌は、それぞれ次のように見出される。

夜やさむき衣やうすきかたそぎのゆきあひのまより霜やおくらむ

住吉御歌となん

『新古今集』巻第十九神祇歌、一八五五番

立帰り又も此世に跡たれん其名うれしき和歌の浦浪

『古今和歌集序聞書 三流抄』一二九番

題しらず

よみ人しらず

ほのぼのと明石の浦の朝霧に鳥がくれ行く舟をしぞ思ふ

このうたは、ある人のいはく、柿本人麿が歌なり

『古今集』巻第九羈旅歌、四〇九番

住吉と人麿の歌は勅撰集に収められているが、玉津島の歌は、『新編国歌大観』中では唯一、鎌倉時代成立とされる『古今和歌集序聞書 三流抄』において、『古今集』仮名序にある「小野小町は、いにしへの衣通姫の流なり」の注として挙げられた例を見出す。玉津島神社の祭神として、衣通姫が祭られていることに拠るのであるが、本伝書が、ここから直接、玉津島の歌を取り入れたとは考えにくい。おそらくこれら住吉・人麿・玉津島の歌、三首をまとめて載せた文献があり、本伝書はそれに拠ったのであろう。

ちなみに、伊勢貞丈「和歌三神考」（天明四年（一七八四））は、住吉・玉津島・人麿を列挙した上で、玉津島・人麿は本伝書と同じ歌を載せるが、住吉の歌は、本伝書の「夜やさむき」ではなく、『伊勢物語』第百十七段にある二首の歌を挙げる。さらに、玉津島の歌については、「後人の偽作」として退けている。ともあれ、十八世紀において、和歌三神として、住吉・玉津島・人麿とその歌が、ある程度定着していたことが認められよう。

なお、続けて出た香がない場合に記す「浦舟」は、まず、舟が島陰に隠れて見えなくなっていくという人麿歌の内容から発想したものであろうが、「明石の浦」と「舟」とが、上句と下句に分けて詠み込まれているという形式的なことも、あるい

は影響したか。

《射巻―二―》三友香

【翻刻】

△(朱)三友香

一 試なし。

一 十炷香の札を用。

一 松の香、竹の香、梅の香、各三包充、ウ香一包、都合十包

の内、松竹梅を一包充、三包除け、残七包に除置たる三包

の内より一包取て加へ、以上八包聞香とし、一炷充焚出し、

皆終りて包紙を開くべし。」射四六ウ

一 松の香に^二の、竹の香に^二の、梅の香に^三のうつなり。無試十炷

香のことく聞べし。

一 記録は、地香独聞二点、二人より一点宛、ウ香独聞四点、二

人より二点充也。皆中には褒美として三友と認る。松竹梅

の内、三炷聞たる人は、地香外^{ハッ}ても其歌の五文字を認るべ

し。皆中は勿論、認てよし。」射四七オ

一 松竹梅の内、三炷出たる證哥を記録の口に認る。聞當たる

時は、五文字を書く也。

證哥

松の香三炷出は

古今集

源宗于朝臣

常盤なる松の緑も春くれは今一しほの色まさりけり

竹の香三炷出は」射四七ウ

堀河百首

師頼卿

年をへて老そふ竹の枝しけみしげくそ千代の影はみえ

ける

梅の香三炷出は

拾遺集

躬恒

降雪に色はまかひぬ梅の花香にこそ似たる物なかりけり

記録認様左のことし。」射四八オ

三友香之記 竹梅除(朱)

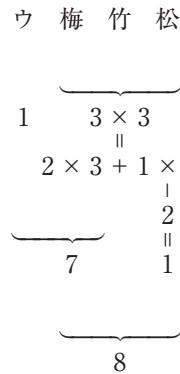
常盤なる松の緑も春くれば

今一しほの色まさりけり

〔表〕射四八ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、地香「松」「竹」「梅」の香、各三包、客香「ウ」の香一包の計十包のうち、八包を用いる。すなわち、「松」「竹」「梅」の香、各一包計三包を取り出し、その中の一包をもとの七包に交せて八包としてから、一炷^{*}ずつ焚く。すべてを焚き終わってから、香包紙を開き、正答を披露する。

* 試香はない。十炷香札を用いて、無試十炷香の要領で札を打つ。最初に出た香には「一」の札を打ち、以下、別香が出るごとに「二」「三」「ウ」の札を打っていく。

点数は、地香の独り聞き^{*}二点、二人以上では一点とする。「ウ」の香は、独り聞き四点、二人以上では二点である。「松」「竹」「梅」の香には、それぞれ歌が指定されており（證歌）、三炷出た香の歌を香之記の冒頭に記す。香之記の最下段には、八炷すべてを聞き当てた場合は、褒美として「三友」と記し、また、三炷出た香をすべて聞き当てた場合は、他の地香を聞き外していても、その香の歌の初句の五文字を書く。また、単に点数のみを記録する場合、その人が三炷出たと判断した香名（「松」「竹」「梅」のうちのいずれかひとつ）を、点数の右肩に記すことが、香之記から知られる。

(2) 和歌作品との関わり

「歳寒の三友」（松竹梅）にちなんだ組香である。本伝書に記

される三首の證歌の出典と本文を確認しておく。

寛平御時きさいの宮の歌合による

源むねゆきの朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり
『古今集』卷第一春歌上、二四番

竹
師頼

としをへて生ひそふ竹の枝しげみ茂くぞ千世のかけはみえける
『堀河百首』一三一六番

同じ（延喜）御時御屏風に
みつね

ふる雪に色はまがひぬ梅の花かにこそにたる物なかりけれ
『拾遺集』卷第一春、一四番

「松」「竹」「梅」の香のうち、ひとつだけ三炷出るようにするのは、「三友」の「三」という数字にちなんだ発想であろうか。三炷出た香は、香之記に證歌一首が記され、また、その香を三炷すべて聞き当てれば、他の香を聞き違えても證歌の初句が書かれるといったように、本組香の中心に据えられることになる。

《射卷一三三》梅花香

【翻刻】

△(朱) 梅花香

古今集

凡河内躬恒

月夜にはそれ共見へす梅花かをたつねてそ知へかりける

此古歌の心によりて組侍る。

一 試なし。

一 十炷香の札を用ゆ。」射五〇ウ

一 一二三ウの香、各一包、都合四包出香とし、打交て一炷充焚出す。無試十炷香の通りに初に出たるに一の札を打、二番に出たるに二の札を打、三番に出たるに三の札、四番に出たるにウの札を打。是試の心也。札は皆折居に入置べし。

一 香包様の事

青包紙四包二三三ウと題名書 赤包紙四包二三三ウ 都合八包拵置、

四種の香、各青包紙に包む。赤包紙は香を入すして青包紙のウと赤包紙のウと壹結とす。地香三種も青赤一包充

同名を結合て、以上四結として打交いづれ成とも一結取

て一炷焚出す包紙は除置 青包紙は嵩にさし置也。扱て香爐一

順廻りて香元へ戻ると、直に其焚殻ウキカラを除置たる」射五一ウ

赤包紙に入て、銀盤の向に出したる順の通りに並べる。四

炷ともに同斯也。焚殻四炷包終て又よく打交、前のごと

く一炷充焚出し、八包皆焚終て八炷の包紙一同に開くべし。

一 出香四炷焚終りて後に其焚がらを聞て初に聞たる木の火末

と聞ば一の札を打、二番の火末と聞は二の札をうつ。三ウ

是に準べし。」射五二オ

一 記録点は八炷の内にて二炷結たるに点をかくる也。初四炷

の内、聞中たるは一点充、後四炷の内聞たるは独聞三点、二

人より二点かくる。各客地香の差別なし。又皆中を梅の香、

皆無をちる花と記すべし。

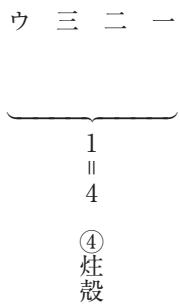
記録左に記す。」射五二ウ

梅花香之記

〔表〕射五三オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、地香「一」「二」「三」の香と客香「ウ」の香、各

一包計四包を用いる。試香^{*}はない。青色の紙の内側に、「一」「二」「三」「ウ」の香名を見えないように書き、それぞれの香を包んでおく。また、赤色の包紙を四包、青包紙と同様に香名を書いて、中に香を入れていない状態で用意する。そして、同じ香名を書いた青包紙と赤包紙を組にした上で、一炷^{*}ずつ焚く(初段)。この時、青包紙の方は、通常どおり鶯(香の包紙を止める金属製の串)に刺し、赤包紙は出香の順に並べておく。これが、一般の組香でいうところの試香にあたる。

答えには、十炷^{*}香札を用い、無試十炷香の要領で札を打つ。最初に出た香には「一」の札を打ち、以下順に「二」「三」「ウ」の札を打っていく。打った札は、折居^{*}に入れておく。

香炉が一巡して香元に戻ってくると、その焚殻を、直接、赤包紙に入れ、銀盤の向こう側に、出香の順に並べる。四炷すべての焚殻を包み終わったら、よく交せて、再度、一炷ずつ焚く(後段)。初段で焚かれた四炷のうち、最初に出た香の火末(焚殻)であれば「一」の札を打ち、以下同様に「二」「三」「ウ」の札を打つ。八炷すべて焚き終わってから、香包紙を開き、正答を披露する。

点数は、八炷のうち、二炷ともに聞き当てた場合に与えられる。つまり、初段の香の焚殻を後段で聞き分ける必要がある。点の配分は、初段の香には一点、後段では独り聞き三点、二人以

上では二点である。客香・地香の点数の差はない。また、すべて聞き当てた場合は、香之記^{*}の最下段に「梅の香」、全て聞き違えた場合には「ちる花」と記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭には、次の『古今集』の歌が載る。

月夜に梅花ををりてと人のいひければ、をるとてよめる
みつね

月夜にはそれとも見えず梅花かをたづねてぞしるべかりける
『古今集』卷第一春歌上、四〇番

焚殻を聞き、もとの香がどれであったかを探し求めるという趣向は、「か(香)をたづねてぞしる」という歌句に依拠したものである。

《射巻一二四》神杵香

【翻刻】

△(朱) 神杵香^{マキスキ}

新續古今集

後三條前内大臣

うき事は色もかはらず祈こししるしやいつら三輪の神

杣

いせ物語

古への賤のおた巻くりかへし昔を今になすよしもかな
三輪の謡曲ヨウキョクにいへる、緒手巻の糸を裳につけて跡をひかへ
てしたひ行、ふる言を以て綴ツたる香也。」射五三ウ

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二三の香、各四包充、出香とす各一炷充外に、拵へ試に出す。

一 本香十二包打交、焚出し、一炷充にて本香の包紙を開きて

筆記し、一番に焚出す香を緒手巻と名付け。假令は、一番に

一の香出れば、一の香を緒手巻と名付け、一の香四包斗を

聞て、二三の香は聞捨也。又二の香、初に出れば、二別お

た」射五四オ まき也。其時は二の香斗聞て、一三の香は聞捨

る。三の香、緒手巻に出る時も同前也。

是は、おたまきをしたひ行こゝろ也。

一 おだ巻の香、四包出るを限として、夫までにて香は終る也

善香のごとし。

一 記録は當り斗を記す。初炷の香銘を緒手巻とかなにて認る

べし。点は二炷聞當るまでは一点充」射五四ウ かくる。三炷

聞たらは二炷目よりは一点充の褒美有て、二点つゝかけて、

都合五点也。四炷皆當りたるは、不残二点宛となして、都

合八点とす。緒手巻の香に一の香出たる時、二の札打て聞

違たる人は、始終一の香に二の札を打て、異名を當とする

べし。其人はかゝつて二の札を當りとして、一の札を打た

るは當りに非ざる也。三と間違たるも同然也。此故に、初

に」射五五オ 間違たる人は、出香と異名の札なれとも、それ

を緒手巻と定めて、二炷目も初に打たる異名の札ならば當

りとす。しかれとも、二炷迄は点はなし。三炷目聞當て打

たる札も、二炷目の札と同然ならば、不残一点充かけて、三

炷目斗り二点かけて、都合四点也初一炷聞當て異名の札打たる故に。二炷目迄は褒美の増なく一点充也。 四炷

共に札銘同しからば、不残二点つゝかけて、誠の當りに立

て八点とするなり」射五五ウ 出香と札銘異名の時は皆かくのごとし。

一 十種香の札にては、同香四炷充有て、札不足する故に、打

たる札を記録へ認めたらは、其度毎に連中へ戻すへし。

一 記録認様左のごとし。」射五六オ

神杣香之記

〔表〕射五六ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

焚き止め

- 一 一
 - 二 4 || 12 || 1
 - 三 1 × 12
- 緒手巻四炷にて終

* 本香には、「一」「二」「三」の香（すべて試香あり）各四包、計十二包を用意する。答えには十炷香札を用いる。一炷焚くごとに包紙を開いて答えを記録する。同香が四炷出て札が不足するため、その度に札を各人に戻す。最初に焚かれた香を「緒手巻」と名付け、それ以外の香は聞き捨てとする。「緒手巻」が四炷出たところで香席は終了となる。

記録には、聞き当てた場合のみを記す。初炷の香銘「緒手巻」は、本香の出の場所では仮名で記す。点数は、二炷聞き当てるまでは一点ずつ、計二点だが、三炷目を聞き当てる時、褒美として、二炷目・三炷目それぞれの一点に、さらに一点ずつ加えられる、一〜三炷あわせて五点となる。四炷聞き当てた場合は、すべて二点ずつ、計八点である。

なお、「緒手巻」の香に、別香の札を打って聞き違えた場合は、それ以降、「緒手巻」の香には、その別香の札を打つことによつて聞き当てたと見做す。つまり、最初に焚かれた香を聞き違えた人は、正答とは異なる札ではあるが、その別香の札を「緒手巻」の香に打っていく。ただし、それで聞き当てたとしても、二炷目までは点数はない。三炷目を聞き当てた時は、一炷目・二炷目を各一点、三炷目を二点として、計四点となる。四炷すべてを聞き当てると、各二点、計八点となり、初炷を聞き当てた場合と同等の点が得られる。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭には、次の二首の歌が載る。

貞和百首歌に

後三条前内大臣

うき事は色もかはらず祈りこししるしやいづらみわの神杉

『新統古今集』卷第二十神祇歌、二二二一番

むかし、もの言ひける女に、年ごろありて、

いにしへのしづのをだまきくりかへしむかしを今に

なすよしもがな

と言へりけれど、なにとも思はずやありけむ。

『伊勢物語』第三十二段、六五番

もつとも、本伝書が述べるとおり、本組香は、より直接的には謡曲「三輪」に拠るであろう。そこで語られる三輪の神婚説話は、つとに『俊頼髓脳』に見出せる。すなわち、夜にしか訪れない夫の帰っていく先を知ろうと、緒手巻の糸の先に針をつけて夫の衣服の裾に縫い付け、その糸を辿って、夫が三輪明神であることを突き止めるのである。『新統古今集』の歌が「しるしやいづら」と詠んだ所以である。最初に焚かれた香を「緒手巻」と名付け、それ以外の香は聞き捨てとし、「緒手巻」の香がすべ

て出るとそこで香席が終わるといふ趣向は、この説話をもとにしている。また、「緒手巻」の香を聞き違えたとき、その誤答の札を、正答の代わりに打ち続けるといふ趣向も、夫に付けた糸を最後まで辿っていくといふ話に着想を得たものであろう。『伊勢物語』の歌は、「をだまき」の代表例として挙げたものか。

《射巻―三〇》深山木香

【翻刻】

△（朱）深山木香

詞花和歌集

源頼政

深山木のその梢とも見へさりし桜は花にあらはれに
けり

此哥によりて組香とし侍る。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二三の香、各二包充^試なし、ウの香二包、都合八包出香とす。

ウの香、外に一包拵^ふへ花^カの香と號て香元の前に」射七二オ置
くべし。出香皆焚終て後に香包紙を開く也。

一 八包皆焚終りてウの試を花の香と名付、焚出すべし。本香
の間に合札打也。札皆打終て此札を始に認め其次に一の折
居より順々に認べし。試の札を見合、一の札ならは一の札
は桜と認、二三ウともに同前なり。其外は深山木を一字充

分て認べし。たとへは一を桜と聞たらば二を」射七二ウ深、三
を山、ウを木と認なり。又二を桜と聞たらば、一深、三山、
ウ木と認べし。銘々にかはるゆへに札讀時、銘々花の札に
心を付て見合讀べし。

一 同香二炷に同し札を打て、上下結たりとも花香^{はなのか}の札と違た
るは中にあらず。

一 点星の事、桜二炷聞たるは二点充、始の桜斗聞」射七三オた
るは貳点、次の桜斗聞たるは一点なり。ウを地香と聞たる
は星一つ付る。一二三の内をウと聞たるは星なし。地香皆
一点充也。始の桜にても貳炷目の桜にても聞たるは花の香、
一二三ウの上に花と跡にて書入べし。記録左のごとし。」射
七三ウ

記録艸稿

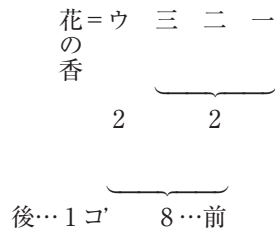
〔表〕 射七四オ

深山木香記

〔表〕 射七四ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、地香「一」「二」「三」の香、各二包と、客香「ウ」の香二包の計八包を用いる。「一」「二」「三」の香には試香はな
いが、「ウ」の香には、本香とは別に、「花の香」と名付けた試
香を用意し、香元の前に置いておく。答えには十炷香札を用い、
すべてを焼き終わってから、香包紙を開き、正答を披露する。

「花の香」は、本香の八包をすべて焼き終わってから焼き、本
香のうち何番目の香と同香であるかを判断して、それと同じ札
を打つ。記録には、札をすべて打ち終わってから、まずこの「花
の香」の札を記し、その後は、一炷目の折居から順に札を記し
ていく。その際に、「花の香」の答えと同じ札には「桜」、その
他の三種類の札には、出香の順に「深」「山」「木」と一文字ず
つ分けて記す。

点数は、「ウ」の香二炷を「花の香」に同じ（桜）と聞き当て

たときは二点ずつ計四点、初めの「ウ」の香だけを「花の香」
と同香と聞き当てると二点、次の「ウ」の香だけの場合は一点
である。いずれの場合も、記録の「花の香」の答えの上に「花」
と書き入れる。なお、「ウ」の香二炷を同香と聞き当てても、「花
の香」の札とは異なる札を打った場合は、先の二炷を聞き当て
たことにはならず、点も得られない。また、「ウ」の香を地香と
聞き違えた場合は星を一つ付すが、「一」「二」「三」の地香を
「ウ」の香と聞き違えた場合は星を付けない。地香を聞き当てる
と一点である。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭には、次の歌が載る。

題不知

源頼政

みやま木のそのこずゑともみえざりしさくらにははなにあら
はれにけり

『詞花集』巻第一春、一七番

深山の繁った木々の中では、桜の梢がどれともわからなかった
が、花が咲くことによってその姿が現れたという歌である。記
録に、「深」「山」「木」に交じっている「桜」を聞き当てると
「花」と記すという趣向は、この歌の内容と語句に拠っている。

《射卷―三二》神垣香

【翻刻】

△(朱) 神垣香

栄花物語の八に

月あかくおかしき夜、権大夫能信、口すさひに、

榊のみこそことに見えけれ

との給へは、女房、

神垣は月もみちもありけれと

なと聞へさせかはしけり

此歌によりて香組とし侍るのみ。」射七五オ

一 十炷香札を用ゆ。

一 能信方五人、女房方五人と分つ能信方上座なるべし。

一 神垣の香三包、月の香一包、紅葉の香三包、榊の香一包、都合八包出香とす。

一 神垣の香、月の香、紅葉の香、各一包充、外に拵へ、女房

方許、試に出す榊の香は客故に試さじ。又、別に月の香一包拵へて香元の

前に置くべし。」射七五ウ

一 出香八包打交焚出し、皆聞終りて札を書記し、本香の包を

開て点をかくるべし。

一 出香焚終て、除置たる月の試香を焚出し、能信方斗へ聞せ、

扱て小記録のことく、紙を折て、能信方連中の名乗を認め、

硯管添て、能信方へ出す。各何の札を榊に打たると認て、執

筆に渡すへし。記録に能信方は一二三榊と認め、女房方に

ては」射七六オ 神月紅ウと認むべし。榊二点、独聞三点、地

香一点充也。能信方は、無試十炷香の通りに点を掛け、女

房方は試十炷香の通りに点を懸るべし。女房方にて神垣札一の、

月札二の、紅葉札三の、榊札ウを打べし。

一 記録認様左のごとし。」射七六ウ

記録艸稿

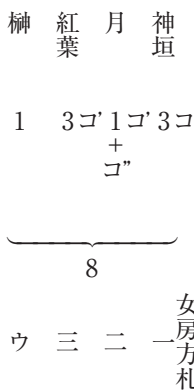
〔表〕 射七七オ

神垣香之記

〔表〕 射七七ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



ゴ 女房方試香

ゴ すべて聞き終わってから能信方へ

* 本香には、「神垣」の香三包、「月」の香一包、「紅葉」の香三

包（以上、地香^{*}）と、客香^{*}「榊」の香一包の計八包を用いる。能信方（上座）と女房方に五人ずつ分かれ、地香の試香^{*}を女房方にのみ行う。客香には試香はない。また、「月」の香一包を別作り、香元^{*}の前に置いておく。

答えには十炷香札を用いる。女房方は、「神垣」「月」「紅葉」「榊」の香について、「一」「二」「三」「ウ」の札を打つ^{*}。能信方は、試香を行っていないため、無試十炷香の要領で札を打つ。通常は、毎回、札が出るたびに答えを控えていくが、本組香では、本香をすべて聞き終わってから、一括して記録する。なお、能信方の札の記録には、まず草稿を作り、「一」「二」「三」「ウ」の札名をそのまま記しておく。

次に、別に作っておいた「月」の香を焚き、能信方がこれを聞く。これが能信方には「月」の試香にあたる。そして、小記録のように紙を折って能信方の名乗りを書き、硯箱を添えて能信方に廻す。能信方は各人、本香においてただ一炷のみ出た香のうち、「月」の香ではない、もう一方の「榊」の香に打った札の名を書いて、執筆に渡す。執筆は、小記録を見て、「榊」と答えた方を「榊」とし、また本香もすべて「神垣」「月」「紅葉」と書き換える。その後、本香の香包紙を開いて答えを披露し、点を記入する。

記録には、能信方は「一」「二」「三」「榊」、女房方は「神

「月」「紅」「ウ」と記す。「榊」（ウ）の香を聞き当てる^{*}と二点、独り聞きの時^{*}は三点、地香は、聞き当てた人数に関わらず一点である。

(2) 和歌作品との関わり

『采花物語』「殿上の花見」における能信と女房の短連歌に依拠した組香である。能信方と女房方に分けるという趣向は、下句に上句を付けるという短連歌の形式に着想を得たものである。また、女房の句にある「神垣」「月」「紅葉」の語を地香の名に用い、能信の句の「榊」の語を客香の名とするのは、能信方を女房方よりも上座とする両者の位置付けと軌を一にする。

本組香は、能信の「榊のみこそことに見え」という句によって、「榊」の客香を聞き当てる^{*}ことが重要な組香に仕立てられている。だが、その方法は、女房方と能信方とで異なる。女房方が、地香の試香を行うという一般的な手順であるのに対し、能信方は、本香の後に試香を行うという、多少凝った手順をとるのである。

このように、能信方と女房方をさまざまに対比させながら、複雑な内容の組香が作り出されている。

《射卷―三五》礮衛香

【翻刻】

△(朱) 礮衛香イソチドリ

古今集

よみ人不知

塩の山さし出の礮にすむ千鳥君か御代をは八千世とぞ
鳴く

此哥を以て組たる也。

一 十炷香札を用ゆ。

一 一の香、二の香、各二包充、千鳥の香二包一包充御香也、客とす、都合六

包打交て、其内二包除け置き、残り四包を一炷充焚出し終
て、又除たる二包を焚出す。六包ともに皆焚終て包紙射

ハニオを開くべし。

一 地香外に拵へ試に出す。客香試なし。

一 初四包と後二包との内に、客香の出様を聞分るキ、ワケを專一とす

なり。

一 記録点、左のごとし。

地香何人聞にても一点充、客香一炷聞は五点、二炷共に
聞は七点充也。後二炷の内を聞は、客地香の差別なく一

点充の増をかくるべし。射八二ウ

一 千鳥香、聞によつて聞の下に褒美を認る。其名目左の如し。

二炷共に初四炷の内に

出て、二炷共に中たるは

上句を書

二炷共に後二炷の内に

出て、二炷共に中たるは

下句を書

初四炷と後二炷とに一炷充

分て出て二炷共に中たるは

哥一首を書

右同初四炷の内に中たるは

千鳥斗りを中たるは

汐の山と書

右同後二炷の内に中たるは

千鳥斗りを中たるは

八千代と書

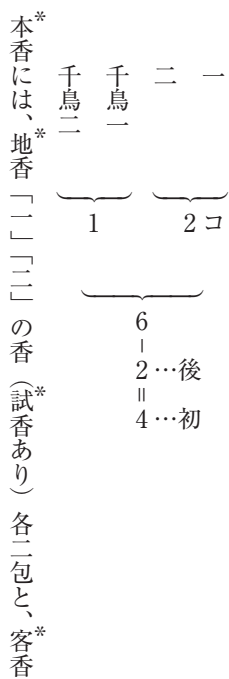
一 記録認様左に記す。射八三オ

礮衛香之記

〔表〕射八三ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



「千鳥」の香（試香なし）二包を別香で用意し、計六包を用いる。そこから二包を除き、残り四包を一炷^{*}ずつ焼き（初段）、次に、先ほど除いた二包を焼く（後段）。答えには十炷香札を用い、六包すべてを焼き終わってから、香包紙を開いて正答を披露する。初段の四包と後段の二包、それぞれの中に、客香「千鳥」の香がどのように出たかを聞き分けることが肝要である。地香を聞き当てると一点だが、客香を聞き当てた場合は、一炷だと五点、二炷ともに聞き当てる七点と高得点である。また、後段の香を聞き当てた時の得点は、客香・地香の区別なく、前述の点数にさらに一点を加える。

^{*} 香之記には、客香「千鳥」の香の出方と、その聞き当てた数によって、褒美として、本伝書冒頭の古今集歌の全体あるいは一部分を記す。すなわち、客香を二炷とも聞き当てた場合、初段に二炷とも出たときは歌の上句を、後段に二炷出たときは下句、初段・後段に一炷ずつ出たときは歌一首を書く。また、初段・後段に一炷ずつ出た客香について、初段のみ聞き当てたときは「汐の山」、逆に後段のみ聞き当てたときは「八千代」と記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭には、次の歌が載る。

題しらず

よみ人しらず

しほの山さしでのいそにすむ千鳥きみがみ世をばやちよとぞなく
『古今集』 卷第七賀歌、三四五番

この歌の磯隠れに住む千鳥の情景を踏まえ、隠れた「千鳥」の香を探し出すというのが、本組香の趣向であろう。初段と後段に分けることで、記録に和歌を書くとき、「千鳥」の香の出方と聞き当てた数によって、上句・下句・歌一首などと書き分けられるように作られている。

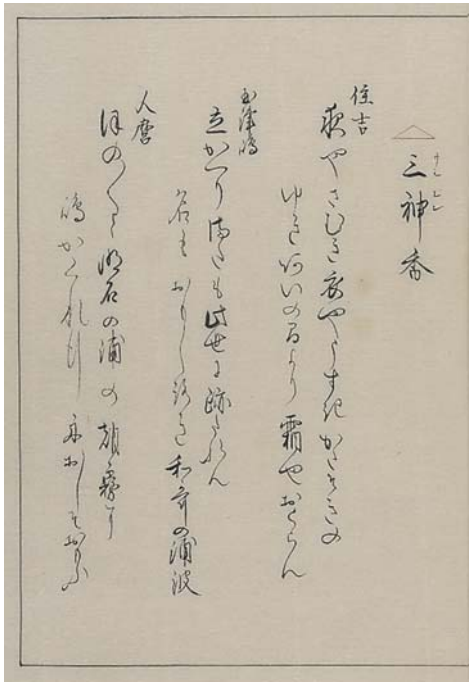
なお、この歌は、千鳥を詠んだ賀歌の先蹤として、後世、「君が代を八千世とつぐるさ夜千鳥島の外まで声ぞ聞ゆる」(続後拾遺集・賀・六二二・前中納言定家・文治六年女御入内屏風に)、「君が世にさしでの磯の友千鳥やちよの声をきくぞうれしき」(拾玉集・三五四三)、「やちよとぞちどりなくなるしほのやまさしでの磯の跡を尋ねて」(隆信集・二六二・文治六年女御入内屏風に、海辺ちどりかきたる所)など、本歌取りされている。

附記

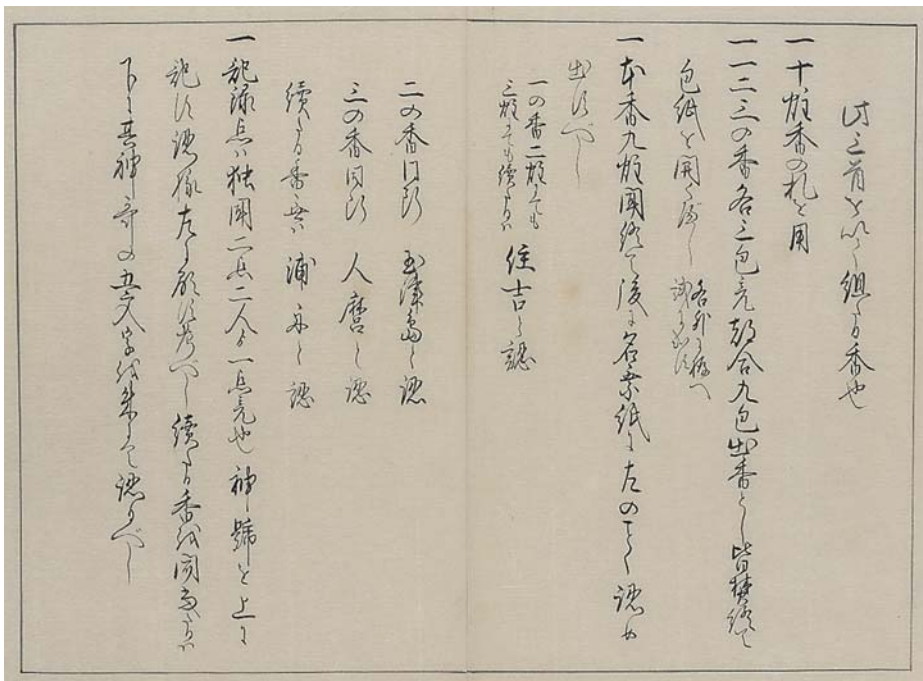
本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究(同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題

番号16K00469、いずれも二〇一六(二〇一八年度)における研究の一部である。

【影印】 綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。



(射・四四丁裏)



(射・四五丁表)

(射・五二丁表)

一二三ウの香名一色部合四色出香一ナ支て
 一初元替紙入 支紙十股香の通り、初一ナ支て
 一のれとナ二番一ナ支て二一のれとナ二番一
 出り小とのれ四番一ナ支て三一のれとナ二番一
 四一のれとナ二番一ナ支て五一のれとナ二番一
 一香色極のり

青色紙 四色 二三ウ 赤色紙 四色 二三ウ

部合八色極を四種の香名青色紙一色は赤
 色部ハ香と入して青色紙のウハ赤色
 紙のウハ青紙ハ地香之種も青赤一色
 元同名と部合ハ一と四倍してナ支てハ
 部ハ一倍ハ一初元替紙 部合ハ赤色 青色
 紙ハ部ハ一と部ハ切て香極一頓して
 香元ハ部ハ一と部ハ其替紙ハ部ハ一と

(射・五二丁裏)

(射・五二丁表)

赤色紙一入を部盤の向一ナ支て一頓の
 通一と部ハ一初元替紙ハ部ハ一と部ハ一
 色紙一又ハナ支て部ハ一初元替紙ハ部ハ一
 八色部盤紙ハ八色の色紙一同一部ハ一
 一初元替紙ハ部ハ一初元替紙ハ部ハ一
 一初元替紙ハ部ハ一初元替紙ハ部ハ一
 一初元替紙ハ部ハ一初元替紙ハ部ハ一
 一初元替紙ハ部ハ一初元替紙ハ部ハ一

一初元替紙ハ部ハ一初元替紙ハ部ハ一
 一初元替紙ハ部ハ一初元替紙ハ部ハ一
 一初元替紙ハ部ハ一初元替紙ハ部ハ一
 一初元替紙ハ部ハ一初元替紙ハ部ハ一
 一初元替紙ハ部ハ一初元替紙ハ部ハ一
 一初元替紙ハ部ハ一初元替紙ハ部ハ一

(射・五二丁裏)

	本	二	三	ウ	一	三	一	ウ	二	
初梅	一	二	三	ウ	ウ	二	ウ	ウ	一	梅の香
青柳	一	二	三	ウ	ウ	二	ウ	ウ	三	六五
白後	一	二	三	ウ	ウ	二	ウ	ウ	三	六五
杜若	一	二	三	ウ	ウ	二	ウ	ウ	三	六五
若竹	一	二	三	ウ	ウ	二	ウ	ウ	三	六五

月日

梅花香

神杖香

新傳香集
く 記す 一色も 一色も 一色も
後之條香内食
ちり ちり やい ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

古の殿のちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

昔と今 昔と今 昔と今 昔と今 昔と今 昔と今 昔と今 昔と今 昔と今 昔と今 昔と今

之梅の籠曲 之梅の籠曲 之梅の籠曲 之梅の籠曲 之梅の籠曲 之梅の籠曲 之梅の籠曲 之梅の籠曲 之梅の籠曲 之梅の籠曲 之梅の籠曲

跡とひら 跡とひら 跡とひら 跡とひら 跡とひら 跡とひら 跡とひら 跡とひら 跡とひら 跡とひら 跡とひら

(射・五三丁裏)

(射・五三丁表)

一十梅香の札と表也

一三三の香各四色先出香名一色先出梅識

一本香十二色并交替也 一初先 一初香の
色紙を圍て筆記 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書 一書

諸の巻と名符 假令ハ一昔 一の香出れハ一
番の諸ハ一と名符 一の香中色汁と名符
二三の香ハ團捨也 又二の香初出ハ二列也

此の巻也 吾所ハ二の香汁 團ハ一三の香也 吾所ハ
三の香 諸ハ巻ハ一色 團ハ一色

是ハ初ハ一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色

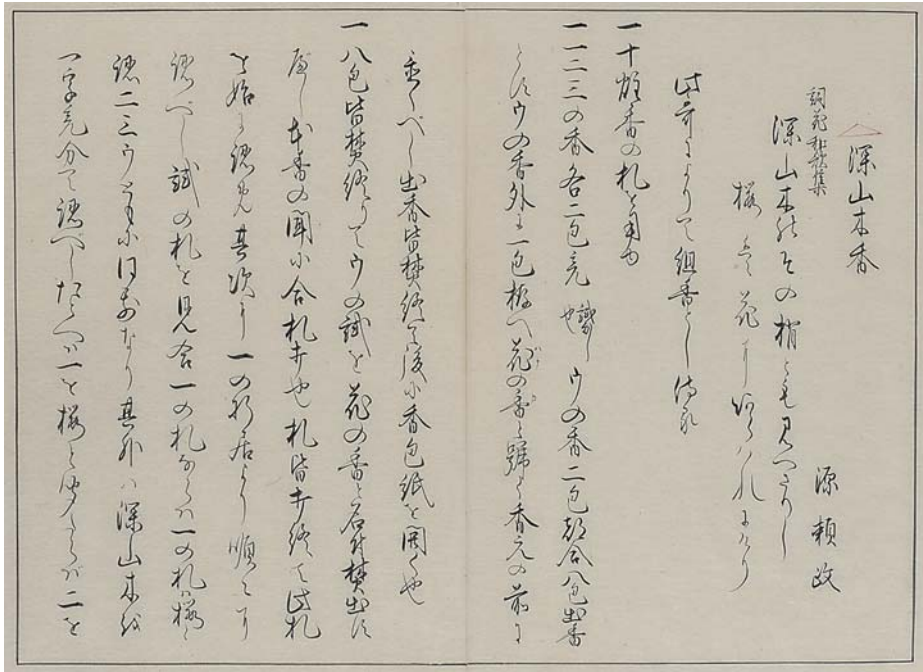
一初巻の香四色出り 諸ハ一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色

一初巻の香一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色

一初巻の香一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色 一色

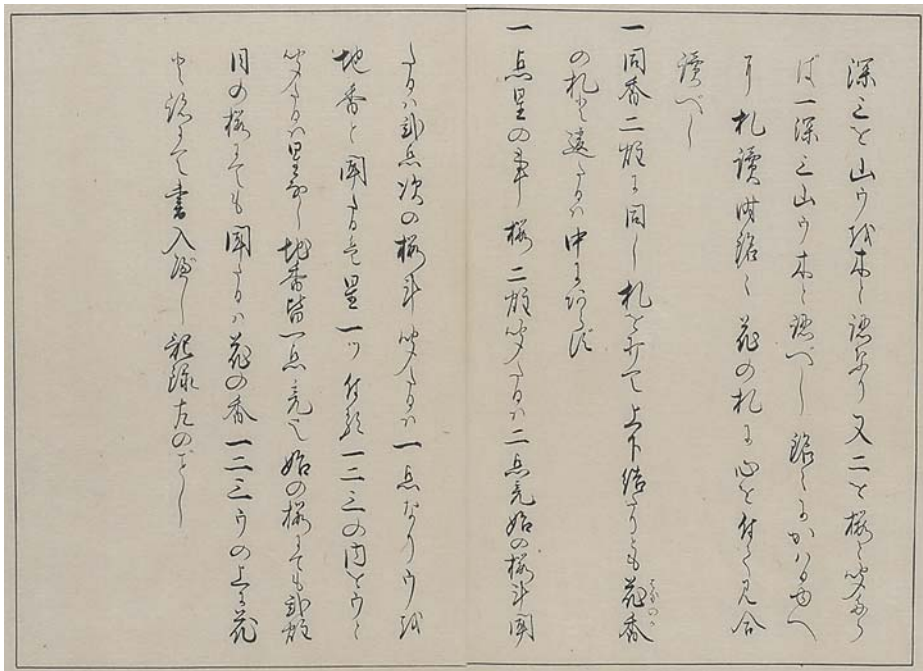
(射・五四丁裏)

(射・五四丁表)



(射・七二丁表)

(射・七二丁裏)



(射・七三丁表)

(射・七三丁裏)

一 出香八色寺入替出 皆因終りて礼と言記
 本香の色と因て与ふるなり
 一 出香替後にて陸を。月の試香の替出 能信
 方斗(ゆ)と香を小記源のくはと折る能信
 方連中の名香の徳の源の能信も出
 各何の礼と辨りて行。徳も辨りて源も
 記源も能信も一二之辨り徳も女房方よりハ
 神月紅ウと徳ハ一 辨二点徳風言地香
 一 与亮(能信方も)試十枚香の与り小点と辨り
 女房も試十枚香の通り小点と与り。女房も
 一 神垣初月礼 紅葉礼 辨りて女
 一 記源徳後たのこ

(射・七六丁表)

(射・七六丁裏)

神垣香之記										記源辨稿									
木					能信方					木					能信方				
名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七

(射・七七丁表)

(射・七七丁裏)

(射・八二丁裏)

(射・八二丁表)

(射・八二丁裏)

(射・八二丁表)

(射・八三丁裏)

(射・八三丁表)

(射・八三丁裏)

(射・八三丁表)